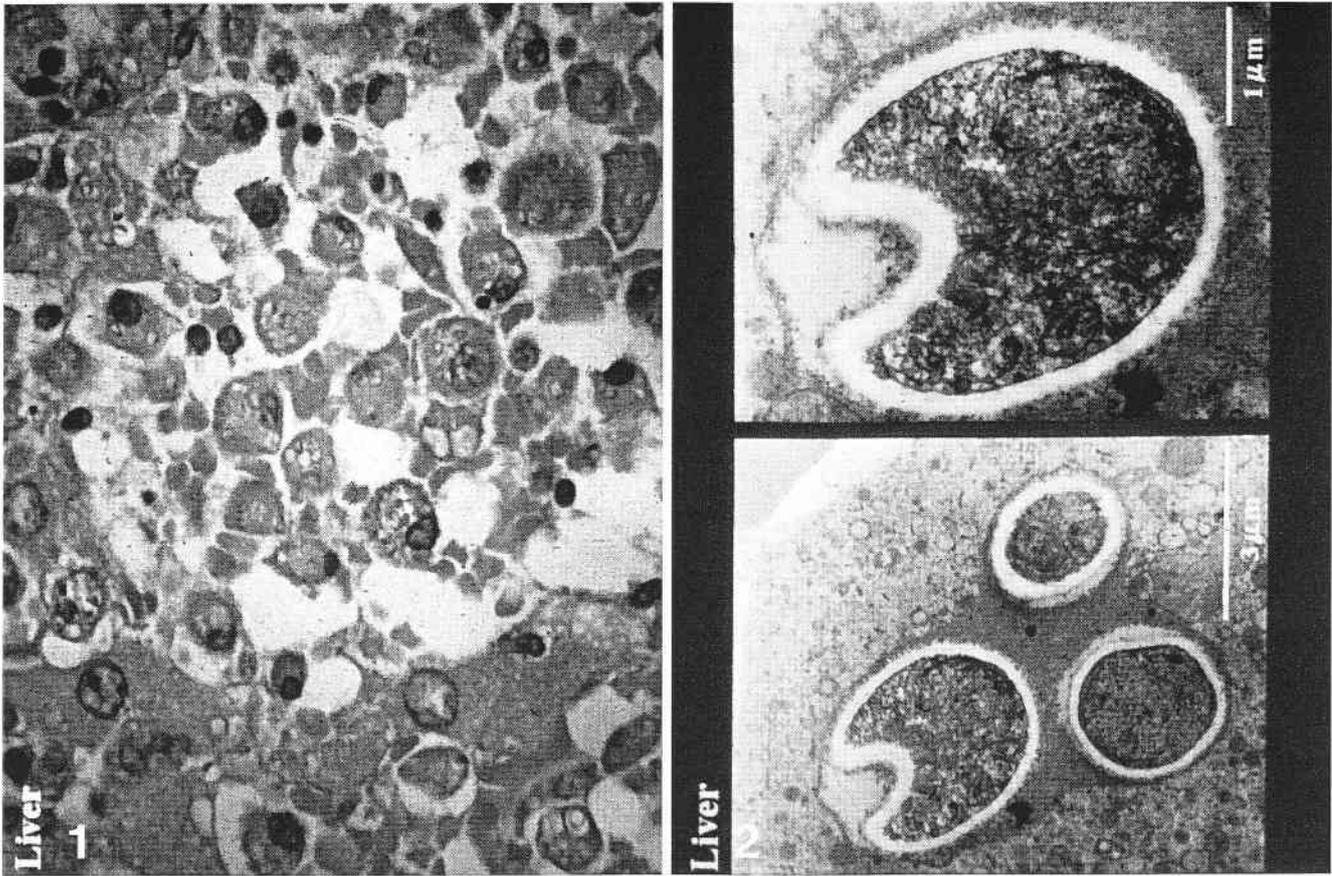


## ラッコの肝臓

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 790



症例はラッコ，雌，4歳11カ月齢。本例はアラスカで捕獲され1993年に導入されたラッコ5頭のうち2頭の交配によって生まれた個体である。死亡2カ月前より食欲不振および体重減少が認められ，心拍数減少，貧血および黄疸を呈し死亡した。剖検では肝および脾が著しく腫大し，肝には大小の結節が密発し，黄疸を伴っていた。導入後すぐに死亡した症例1例の肝にも本例と同様の所見が観察された。  
**提出標本：**肝の類洞には多数のマクロファージが遊走し，マクロファージおよびクッパー細胞の細胞質には小型の酵母様真菌が豊富に認められた(図1)。その他，肝細胞索の解離，肝細胞の消失および再生像，胆汁栓の形成，類洞内およびグリソン鞘のリンパ球および形質細胞の中等度浸潤が見られた。酵母様真菌は脾のマクロファージ，肺の肺胞マクロファージ，腎糸球体毛細血管内に遊走しているマクロファージの細胞質内にも観察された。酵母様真菌はPAS反応で淡紅色に，グロコット染色で黒色に染色された。グロコット染色では少数の菌糸も観察された。

肝の電子顕微鏡的検索の結果，マクロファージの細胞質内に大きさ2-4 $\mu\text{m}$ ，円形から三日月状の酵母様真菌が認められた。真菌は0.3 $\mu\text{m}$ 程度の厚い細胞壁を有し，明瞭な核および細胞内小器官(ミトコンドリアなど)も観察された(図2)。その後の免疫組織学的検索により，本菌体がヒストプラズマであることが証明された。

以上のように，肝において組織学的に，①細胞質に酵母様真菌(ヒストプラズマ)を含むマクロファージが類洞に多数遊走していること，②リンパ球および形質細胞が類洞のみならずグリソン鞘にも浸潤していること，③肝細胞の消失および再生像が観察されたことから，病理組織学的診断は「多数のマクロファージの出現を伴う真菌性肝炎(Histoplasmosis)」とした。本邦におけるヒストプラズマ症の報告は少なく，ラッコにおける本症の報告は無い。これまで本原因体は日本に常在しないとされている。本例のように輸入動物を介して，本原因体が海外から国内に侵入する可能性があり，注意する必要があると思われる。